

[残存ポケットはインプラント周囲炎のリスクか？]

Cho-Yan Lee J, Mattheos N, Nixon KC, Ivanovski S.

Residual periodontal pockets are a risk indicator for peri-implantitis in patients treated for periodontitis.

Clin Oral Impl. Res. 23, 2012, 325–333

従来から歯周炎の既往を持つ患者は、インプラント周囲炎の発症率が高いことが発表されてきた。では歯周炎既往の何がいけないのだろうか？この論文はそこに一步踏み込んだものである。先に本会から発刊された『歯周病患者におけるインプラント治療のガイドライン』でも触れられている論文であるが、非常に興味深いものであるのもう少し細かく取り上げていきたい。

対象はオーストラリアの開業医で治療を受けたインプラントである。30人の歯周炎の既往を持つ患者（Periodontally compromised patients = PCP群）と、既往を持たない患者（Periodontally healthy patients = PHP群）を取り上げ、それぞれにストローマン・インプラントが埋入された。5年以上のフォローアップ（平均7.99年）の後、PCP群では、さらに少なくとも1か所以上 $\geq 6$  mmの天然歯残存ポケットを有する群（Residual periodontitis = RP群）と、有しない群（Non-residual periodontitis = NRP群）に分けそれぞれのインプラント周囲炎の発症について検討された。

結果はPCP群でのインプラント周囲炎の発症率（インプラント・レベル）は27%、PHP群では13%であったが、さらにRP群、NRP群に分け観察すると、RP群では44%と有意にインプラント周囲炎の発症率が高かったのに比較し、NRP群では15%とPHP群の間に有意差は見られなかった。結論として、インプラント周囲炎の発症に関係するのは、歯周炎の既往よりも、その残存ポケットである可能性を示唆している。

この論文の結果をどう臨床にフィードバックできるだろうか？たとえ歯周炎の既往があっても、歯周ポケットが十分にコントロールされていれば、その発症率は歯周炎の既往のない患者と同等であり、その意味ではインプラント周囲炎の予防のためには、残存天然歯の歯周炎のコントロールがいかに重要であることをこの論文は説いているといえる。